

息子と私とホームレス

高橋美智子

私の息子は、成人式を迎える前に死んでしまいました。とても美形で父親似でした。(うぬぼれでしょうか。) 息子のことを考えると今でも涙が溢れてきます。本当に悪い母親だったと思っています。

夫は商売をしていましたが、51歳でなくなり、その後は息子と2人で商売を続けていたのですが、私は母親でありながら、淋しくなり、とうとう男を作ってしまいました。思春期を迎えていた息子とはなかなかうまくいけなくなり、挙句の果てに、男に貢ぎ過ぎ商売を潰す羽目になったのです。

すぐに借金だらけになりました。結局息子も連れてホームレス生活に入ることになりました。今は息子を思うたびにもっと早く水曜パトロールの会を知っていればという気持ちでいっぱいです。

数年後に、息子は死にました。20歳前でした。本当にかわいそうなことをしたと後悔しています。死ぬ前にこんなことを云ってくれました。「お母さんには世話になったからなあ。」

息子にはホームレスをさせてしまっていたので、私はびっくりしました。「やつぱり、お母さんの作った料理が一番おいしいよ。」

息子も友達の家を転々としながら寝場所を探す生活でした。寝場所が無いときは野宿をさせてしまいました。

「かわいそうな息子よこの母を許して。」それでも私に対して「おかあさんが可哀相だ。可哀相だ。」と何回も言ってくれ涙を流してくれました。小さい頃からかわいい顔をしてお乳を吸い私と目があうと私の乳首をかんで遊んでいました。

「乳飲み子が 母の乳房をもみてかな」

「みどり子の いかにいとしきしぐさかな」

ああ 神様私をお許し下さい。私は大切な大切な宝物を失ってしまいました。高価な命(息子)を簡単に捨ててしまいました。どうかお許し下さい。何も心の中で叫んでも、海へ行って泣いても、山へ行って泣いても、もう戻せません。

息子が体調が悪くて久里浜の病院へ入院させたのも子供が行くところがないので、子供を守るためでした。見舞いに行くとしても喜んで三浦海岸まで出て海を眺め、「あっちが

熱海かな。こっちの方が葉山の方だよ。」といいながら別れを惜しんでいるみたいでした。

三浦海岸のあの群青色の海は永久に忘れることができません。

実は息子は、占い師（タロット）に、「20歳までしか生きられないね。」と言われたことがありました。

私も風水で占いをしてもらった時、「この子は20歳で線が切れているね。」と言われたのにまさかと思って忘れていました。息子は分かっていたのです。だから私に優しく甘えていたのです。そして、私も切なくて、切なくて、病院から帰る時は涙が出て止まりませんでした。

「さよならと別れつげしがなお思い」

「しのび泣く私の心だれぞ知る」

「罪の色 どんな色しておちてくの」

神様どうかお許し下さい。どうか私に宝物（息子）をお返し下さい。お願いします。何て厚かましい母親でしょう。

本来なら浩志ちゃんもう少し待っていて、あと少しでお母さんが会いに行くからねと言わなければいけません。

しかし、今は水曜パトロールの会と出会い、そして息子のためにも人生を全うしようと考えています。

私がホームレスのときは本当にお恥ずかしい話ですが、コジキをやっていました。

最初は私の住んでいた地域からはじめました。あんなに愛想よく話をしたり笑ったりしてくれた人々が、冷たい顔になって、挨拶もしてくれなくなりました。

**市というところは横のつながりが強く誰かが何かを知ると、すぐ噂になり知れ渡ってしまつて、「高橋さんがお金を借りに来たら、貸しちゃだめ。」だれも貸してくれなくなつてしまいました。途方にくれていた私に同棲していた男は、「お前、明日からお寺や教会を回れ。」と命令され、私に出来るだろうか不安でしたが、まず神奈川県全域、東京都全域そして千葉県、静岡県、と次々と回りました。電車に乗る時も交通費はどこに行くにも130円だけしか使わず、下りるときはうまく逃げました。食事は、朝も昼もマクドナルドのパントコーヒーのみでした。夜はインスタントラーメンや弁当で済ませました。いつも腹いっぱい食べたいと思いがらの毎日でした。

初めにお寺に飛び込んだ時は胸がドキドキでした。敷居をまたいで

「すみません、ごめん下さい。」

「はいなんでしょうか。」

「あつ、すいません、御住職様はいらしやるでしょうか。」
いる時は出て来てくれて、

「御住職様ですか。私、実は20歳になる息子を亡くしてもう自分も生きているのがいやになって死のうかと思つたのですが死にきれず、あちらこちらとさ迷つております。どうかお金を恵んで下さい。お願いします。」黙つて奥に入つて行つて1000円札を持って来てくれました。やったあー。この調子でいけば10軒まわれば一万円位簡単に集まるなと思つてしまいました。しかし私の足は、もう歩いて、歩いて、血豆ができていました。雨の日も風の日も同じ靴を履いているので足がふるふるになり水虫になっていました。それでも同棲男は、感謝の一言もありませんでした。

私はそんな男に愛など感じなくなつてきていました。

だけど生きるために頑張らなくちゃと、自分を励まして、浩志ちゃんと息子の名前を呼び、心の中で涙を流していました。

ここで少し考えました。ただ闇雲に歩いていても時間がかかるだけなので、まず図書館か役所へ行つて、タウンページを見つけ、寺社、教会のまとまったページから全住所をメモして、現在いるところから近い場所から回るようにしました。秋から冬にかけて日が暮れるのが早いと林の中の真つ暗な道を歩かねばなりません。怖いという気持ちはありませんでした。ただひたすら歩いて町へ出なければという思いでした。時には親切な人がいて、近くの駅まで送ってくれたこともありました。

私は、そうしているうちに私は声を出すのも面倒くさくなつてしまい、巫女様や住職様に、「私はコジキです、どうかお金を恵んでください。」こんな自分が可哀相で自分で自分を慰めていました。頑張るんだよ。と自分に言い聞かせながら。

東京駅の地下で男と待ち合わせして、その日の稼ぎをズボンのポケットから出して渡していました。稼ぎが多いときも、少ないときも男の顔色をみて機嫌がいいかどうかいつもドキドキしていました。

天国にいる息子の名前も何度も呼び、今日も一日終わったよと心の中でつぶやいています。

稼ぎがいいと一杯飲ませてくれます。そしてお互いの稼ぎが多いと、新小岩の安いホテルへ泊まりました。そこで洗濯して明日までに乾くようにします。それから食事を取りました。もうクタクタですぐに眠りにつきました。稼ぎが悪い時は横須賀線に乗つて***駅で無賃で降りて（夜遅いので駅員さんがいないときがあるので。）夜を過ごしました。

夏場はひんやりとしていいのですが、冬場は寒く息子が残してくれたコートを足に巻いて小さくなつて眠りました。この場所は実は息子が見つけた場所でした。私達が寝るようになりまして。そこも夜遅く行つて朝早く起きないと誰かに見つけられたら大変です。8時には起きて近くの公園の水道で顔を洗つて又、* * 駅まで歩いて行き時々ですがマクドナルドのハンバーグとコーヒーを食べることもありました。でもまともにマクドナルドを食べたことはありません。

いつも階段の人通りの少ないおどり場とか、とにかく人通りの少ない場所でハンバーグをむさぼりました。

さてこれから今日の始まりです。このままどこかへ行つてしまいたい気持ちでした、いつそ気でも狂えばいいのと思つてみたり、あの苦しみは、なんというかうまく書けませぬ。

出発の男の切符は、行く先のはつきりしたのですが、私のは130円だけのいつもの切符です。そして別々の電車に乗つて行くのです。わたしは近場は回り終わつていたので遠いところへ行くしかありませんでした。

私はどこへどうして行つたものか、お世話になつたお寺の名前すら忘れるほど何軒も回りました。ある一軒のお寺の住職様が、私の話を聞いて私と同じ様に泣いてくれ、帰りには300円とそれに粘土で作つた小さなお地藏様を渡してくれました。

「これを持つて行きなさい。」

いまでもそのお地藏様に毎朝手を合わせてお祈りをしています。

実は、私の同棲男は学生時代に薬（ヤク）をやつていたそうで、腕に何個かの注射針の痕がついていました。だから感情の起伏がいつも激しく、物にあたつたり、息子はよく殴られたりしていたようですが、息子はそれを私に隠していました。私にはだいたい分かりました。息子が可哀相でした。心がガクガク鳴るほど泣けてきて男を罵つてやりたい。でも抑えるしかありませんでした。愛という気持ちがあるんだん薄れてきました。どうしたらこの人と別れられるのだろうか。そしてとうとう本当の私を取り戻せる時がきました。

その日も歩きましたが収入がまったくなくポケットには500円しかなくそれを渡すと男は、「なんだこれだけか。ふざけてんじゃあねえよ。おまえなんかどこかへ行つてしまえ。」

私はバツと踵を返すと川崎駅の改札口を急いで出て、西口の古い階段を降りながら、もう帰らないこれで完全に終わりにするんだと決心をしました。

私は自由になりました。心の中で亡くなつた息子にも報告していました。

そして現在は一人で生活しています。でも孤独ではありません。天国では息子が見守ってくれています。さらには水曜パトロールの皆さんとも固い絆で繋がっています。